訳有りの記憶喪失でも幻想入りできる、というかできてた

gyudon280yen（駄作工場長）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
訳有りの記憶喪失でも幻想入りできる、というかできてた

【Ｎコード】
Ｎ３１５２Ｚ

【作者名】
ｇｙｕｄｏｎ２８０ｙｅｎ（駄作工場長）

【あらすじ】
筆者が連載しているインフィニット・ストラトス二次創作「訳有りの記憶喪失でも生きていける」の主人公『如月音羽』の幻想入り番外編のまとめみたいなものです。※作者の知識はネット検索・二次創作・某笑顔百科などからの情報のみですので原作の無知による差異の発生が予想されます。それでも良いという優しい方はどうぞお楽しみください。

その１「幻想入り」（前書き）

本編知識３１までが最低限必要です、また、ストーリー進行によってはチート主人公のような展開になることが予想されます。その場合は「弾幕ごっこ」と「近代兵器」が戦ったら、という解釈でお願い致します。
※本編と違いフラグ乱立という展開も有り得ますので、あくまで「番外」として読んで頂けたらと思います。

最後に・・・

「ゆかりんをＢＢＡって言った奴表に出ろ！」

その１「幻想入り」

「あ？」

とある休日の土曜日、銃器などを裏ルートで仕入れてほくほく顔・・・・・それはそれでおかしいか。まあ、例えて言うならＩＳの８巻がやっと出て買えたぜ！って感じくらいに嬉しいみたいな感じだ。例えがメタなんて言っちゃいけない、分かりやすければ良いんだ。で、なんなのこの足元にぽっかり開いた穴は。

「おわぁ！？なんだこれ？ってか、落ちる～！」

どうにか飲み込まれまいと道路を掴むも、穴がそれ以上に広がり飛ぼうにもジェットパックが整備中であり手元に無いことを思い出した。あれ、詰んだ？なにこの状況、え、え？

「Ｎｏ～～～～～！！」

最期の踏ん張りも効かず、その真っ暗な穴に俺は飲み込まれてしまった。藍越学園に入学して初めての夏休み、初日の出来事である。

□■□■□■□

「どこだここ」

気づけば見知らぬ森の中、周囲には青々とした森林が遠くまで広がっていて―イオンが過剰摂取できそうなくらいだ。過剰摂取とかイオンにあるかどうか知らないけども、人っ子一人見当たらない、動物の気配も感じない。あるのは視界いっぱいに広がる森林、もとい樹海だけである。

「携帯は圏外、ＧＰＳも不可。どういうことなの」

衛星の回線を乗っ取る魔改造を施してあるにも関わらず、携帯の左上にはどや顔で圏外が鎮座している。まだ買って改造してから三日しか経ってないぞおい、すぐに使えなくなるとは何事だよ。せっかく米軍の軍事衛星乗っ取れるレベルにしたっていうのに、あ、身の安全って意味でね。軍用レーザー砲搭載されてるから。

「まあ、悩んでても仕方ないか」

まずはどこか人のいるところに出て、ここがどこかなど情報を手に入れなければいけない。悩んでいる暇なんてないんだ、早く家に帰らなければ・・・・あのままイギリスに墓参りに行く予定だったけども。ひとまず、現状を打破するために俺は森を歩いていった。風の向きからしておそらくこっちに行けばいいはずだ。

□■□■□■□

そうは言ったものの、かれこれ二時間。さきからぐるぐると同じ場所を歩いているような気がしてならない、目印を付けてきたからそれは無いとわかるが・・・景色が変わらない。このままでは結局遭難してしまう、すでに遭難してるような気がするけども。

「まいったな」

諦めて死神の瞳
リーパーズ・アイ
を起動させようと眼鏡に手をかけようとした途端、近くの草むらから何かが動く音が聞こえた。

「リスか？流石に熊は無いだろうが」

とりあえず気になったので自身が遭難状態にあることも忘れて音の発生源へと近づいていった、できればリス所望、可愛いは正義である。誰か・・・確かジャックがそんなこと言ってた、絶対違うと思うが。

「うおっ！？」

突然足元に飛び出てきたものだから、思わず驚きのあまり後ずさり。そのまま後ろへと倒れこむように転んでしまった、丁度尻が当たったところに小石が突き出ていたみたいで痛い。まだ痛みが残るそこをさすりながら飛び出てきたそれをようやく見る。白い・・・・毛玉？目と口はついているみたいだが、何も言わない。じ～っと俺の顔をガン見している、なにか言ったら言ったで怖い感じもするけど。油で揚げたらおいしそうだなこれ、抹茶塩を少し振りかけてサクッと。ひとまず初見の生物であるのは確かだ、なんだこれ。

「・・・・・・・・・じゅるり」
「・・・・・・・・・（ガン見）」

小腹が空いてるし、捕獲してみるか。新種だったらおそらく研究所とかから報酬とかも貰えるかもしれない、既に総資産が企業のそれを超えてるけど。一昨日に銀行口座の金額見たら大企業の年収数年分になっていたけども、どう使えと？オルコット家には裏ルートで送金したけどもさ、それより今はこいつを捕まえるのが先だ。

『・・・・・・・・・』

今まさに手を伸ばそうとした手前で、その美味しそうな毛玉は素早い身のこなし（？）で遠くへと飛び跳ねて逃げていってしまった。ああ、貴重な不思議生物兼食料になりそうだったなにか・・・。名残惜しくそれが居なくなった方向を見ると、いくらか明るく見えた。どうやらその先は開けているようだった。

「お、おお！出れた～！！」

5分ほど歩いていくと、見渡す限りが広大な草原になっていた。まあ、濃い目の霧がかかっていて地平線が見えないんだがな。それでも森の中で過ごすようなことにならなくて良かった、持ってる食料なんてカロリーメイト食いかけの一本しか残ってなかったからな。流石に寝袋無しで野宿はきつい、いくら大丈夫なように鍛え上げられてしまったとはいえ。

「どうするか、このままここに突っ立ってるわけにもいかないし」

ここから人が住んでいそうな集落は見えないが、森と反対側になら人里くらいはあるはずだ。というか、無かったらマリアナ海溝なみ

に深いため息を限界まで吐くことになりかねない。ジェットパックが手元に無い以上、上空から飛行して調べることもできないし。・・・・・歩くしかないか。

□■□■□■□

歩き始めて既に１０分が経過した、どこにも集落なんて見えないし水田のようなものも見えない。心地良いそよ風が俺の顔を優しく撫で付けるだけ、あ～静かだなあ。まあ、まさかこんな場所で迷子とは夢にも思わなかったわけですが。平原で迷子とかどうやったらできるんだろうね、俺がなうな感じでそれだけど。
俺のチタン合金ハートが傷ついてため息をはぁと吐いていると、どこからか声が聞こえた。

「どうして迷子になっているか知りたい？」
「ん？」

項垂れていた顔を声の聞こえた方向に向けると、そこに青い服を着た小さな女の子がどしっと構えて立っていた。軽そうなのにどっしりとはこれいかに、帰れたら一夏にでも教えておこう。で、迷子の理由だって？

「道に迷うのは妖精のせいなの」
「・・・・厨ニ？邪気眼でも発動した？」

というか、このＩＳっていう科学技術の塊が世界の中心となっている世の中にそんな非科学的なものを出されても。普通ならはいそうですかって納得できるわけがない、というか中二病患者を相手に話している暇など無いんだが。見たところ小学生っぽいし、ひとまず人里まで案内してもらおう。

「違うわよ！いきなり失礼ね」

「ああ、すまん。ところでどこか近くの人里まで案内してくれないか？君はどこに人が住んでるか知ってるかな？」

「もちろんよ！」

おお、助かった。元気に返事をしてくれったってことはもう安心だ、無事に人里に行ける。

「じゃあ、案内お願いしても良いかな？」

「道を教えてほしいの？それじゃあ・・・・」

「勿論お礼はするよ、できる限りだけど」

俺が言い終わった瞬間、両手をこちらに向けてくる女の子。―なにするんだろう、おんぶでもすれば良いのか？気の強い子みたいだから、それは流石にありえないか。以上、セシリアを相手に頑張った俺の経験による考察終了。

シュパン

「え？」

視界を埋め尽くすとまではいかないものの、多数の小さな氷塊矢のように放たれて。そのうちの数個が俺のすぐ真横を通り過ぎていった。当たりはしなかったものの、サイドテールに少し掠った。体に

命中しなかったものの、掠った髪が少々散らばったことから相当の威力を持つことがわかった。体に当たれば怪我だけでは済まないと直感で理解した。

「いきなり何しやがる！」
「案内してほしかったら最強のアタイを倒してみなさい！！」
「は！？」

一体何がどうしてこうなった、道案内を頼んだら何故か戦うことになったし・・・それ以前にあの女の子手から氷の弾撃ち出したぞ。教えてくれないか、ジャック。ここに居ないから意味無いけどもさ。そうだ、良く考えろ俺。きっとこれは夢だ、幼女が手から氷塊撃ちだして俺を狙ってくるなんてことあるわけないじゃないか。どこぞのゼビウスでも相手は女の子じゃないぞ。

「あいたたた・・・流石にこんなリアルじゃ夢なわけないか」

頬をこれでもかとつねって見るが、考えるまでもなく非情なまでの痛みが伝わってきた。認めたくないが認めるしか道は無いらしい、これは紛れも無く現実だった。大人しくやられるわけにもいかないが。

「あんたを冷凍保存してやるわ！」
「話を聞きやがれ～！！」
「当ったれ～～～！！」
「言葉のキャッチボールしてくれ～！」

いくら氷塊をばら撒いてくるとは言え、相手は女の子。むやみやたらと銃器を出すわけにもいかず、彼女の撃ちはなってくる氷弾の雨を避けるはめになってしまった。毎日命がけの銃撃戦ばかりで弾薬

に非殺傷のゴム弾なぞ入れているわけもなく、対抗もできるわけがない。

「誰か助けてくれ～！ｈｅｌｐ　ｍｅ！！！」

□■□■□■□

「あらあら・・・・幻想郷に来て早々、大変な目に会ってるみたいね」

さらにそれは言葉を続ける。

「まあ、私が助けてあげるのも良いのだけれど」

悩むような声を出すが、気にせず続ける。

「こんなに面白いことに手を出すのもあれだし・・・・もうちょっと様子を見ても良いかしらね」

ふふふと笑いながらその光景を見ていた。

「ここは一つ、彼のお手並み拝見ね」

その１「幻想入り」（後書き）

さて、始まりました（？）

我らがシスコン騎士、音っちが幻想入りです。
いや、これまで番外ってことで本編側でやっていたんですけどねｗ

本編での勇姿（笑）を見たい方は作者マイページから「訳有りの記憶喪失でも生きていける」からどうぞ。
←直アドレス
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８３３５ｖ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3152z/

訳有りの記憶喪失でも幻想入りできる、というかできてた

2011年12月11日00時59分発行